

## 【緑地を楽しむ本】



### 『ひとかけらの木片が教えてくれること』

田鶴寿弥子 著 淡交社

筆者は文化財などを修復するために、数ミリの木片から、それが何の木なのかを調べている研究者。文化財なので、修理のためとはいえ、削るわけにはいかず、ボロボロになってきた部分のかけらから調べてゆくという。色、重さ、香り、味、そして組織を顕微鏡でのぞいて……。仕事で会う人に「木材の研究をしています」というと「木がお好きなんです」と、かなりの確率でいわれるそうだが、昔から木が好きだったというわけではなかつ

と考え、今では「阿呆の鳥好き、貧乏の木好き」という諺も気にせず、「好きです」と即答できるようになったとか。小さな木片の向こうに遠い昔の人々の生活が見えるような楽しい本だ。おまけ：筆者が研究をしている木材の同定のために、元となる標本の木の保管場所「材鑑

調査室」（京都大学宇治キャンパスにある）が、オープンキャンパスの日ならば、一般人でも見学ができるというので行ってみた。偶然、筆者にもお会いすることができお話したが、「地味な研究なので、後に続く研究者がいないんです。その危機感もあって本を書きました。」とのこと。「地味な研究」を認める社会であってほしいと、つくづ